

芦屋大学論叢 第73号
(令和2年9月16日)抜刷

《実践報告》

芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(1)

—制作側からの視点—

井 村 薫 子
佐 藤 真左美

《実践報告》

芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(1)

－制作側からの視点－

井 村 薫 子
佐 藤 真左美

1. はじめに

芦屋大学経営教育学部経営教育学科にバレエコース（以下、本コースとする）が誕生したのは2012年のことである。開講当初は3名と入学者数も少なく、スタジオも常設されていなかった。そんな中で第1期入学者を含め、4年後に卒業公演を実施することが可能であるとは誰も思っていなかったであろう。

本コースが初めての卒業公演を迎えられることに、コース担当教員一同が心から喜びが隠せなかった事を思い出す。新年度の開始前から細かい準備等を開始し、毎週のようにミーティングを開き、担当授業時間内に準備できることは早々に開始していった。初めての大事業であり、これからの恒例事業となっていくようにという将来計画も含んだ事前作業には初年度が一番時間をかけたと覚えている。

2015年12月、第一期生の卒業公演開催以降、毎年欠かすことなくバレエコースの一大行事として開催してきた。通常のパレエ発表会運営作業だけでなくバレエコースの将来性を考慮して多くの準備作業の成果が公演を成功に導き、安定した恒例行事となったと実感している。

バレエコースは少人数での運営であるが、毎年卒業生の個性を生かし、何よりも全員が楽しめる舞台を学生の力で運営できるようにする、という初年度の精神は毎年受け継がれて現在がある。地道な作業や、充分でない環境下における彼らの練習に対する意欲と向上心は、将来社会人として生きていくための大切な礎となり、なにより大学生活4年間の集大成としての達成感につながったと実感している。これらの成果は、初公演以来、後輩に脈々と受け継がれている。

2. 実践報告

2-1. 概要

本コース卒業公演は、毎年12月頃に芦屋市民センター・ルナホールに於いて開催してきた。芦屋市民センターを利用した理由は、芦屋市に所在する大学であるため、集大成としての卒業公演を通して芸術を伝え、一方では地域の方々にバレエコースの存在を知ってもらうこと、他方は、地域の文化事業に寄与したいという思いからである。

卒業公演の出演者は、本コースの学生だけでなく、芦屋学園バレエクラブ生（中高の生徒）や附属幼稚園の課外授業バレエクラス生（園児）、バレエ教師課程ディプロマコース生（社会人）より有志を募った構成になった。

まず、第一期生から第五期生までの各公演における開催日時、卒業生の人数、公演参加総人数を表1に示す。

表1：過去5年間の公演参加者数

	公演開催日	卒業生人数	公演参加総人数
第1期生卒業公演	2015年12月4日	2名	38名
第2期生卒業公演	2016年12月3日	5名	27名
第3期生卒業公演	2017年12月7日	2名	25名
第4期生卒業公演	2018年12月21日	1名	33名
第5期生卒業公演	2019年12月20日	1名	27名

次項では各公演の選曲理由（全学年で取り組む古典バレエ作品）、作品としての完成度、達成感、そして学年ごとの主題について報告する。

主作品の選曲にあたっては以下の点を重要視した。

- ア. 卒業生全員が満足できる演目である事
- イ. 卒業学年の個性，カラーが十分に発揮できる演目である事
- ウ. 送り出す在校生が協力するだけでなく意欲的に取り組める演目である事
- エ. クラシックバレエ作品から選曲する事（古典音楽作品の学修をシラバスに記載している）

2-2. 各公演演目の選定理由と成果，課題

2-2-1. 第一期生卒業公演

(1) 第一期卒業公演の出演者

- 大学生
 - 4年生：女子2名，3年生：女子4名／男子1名，
 - 2年生：女子3名，1年生：女子1名／男子2名
- 中高バレエクラブ生徒：5名
- 附属幼稚園バレエクラス園児：20名

(2) 選曲について

卒業公演は2部構成での上演としており，前半の第1部は各学年の作品発表，授業作品発表，卒業生振付作品発表を小品集仕立てとし，後半第2部で古典バレエ作品からの抜粋を上演する形式とした。第2部での古典バレエ作品の選曲をする際，以下の点に焦点を置いた。

- ①本コース卒業公演の初めての開催であるということ。
- ②世界三大バレエと呼ばれる，チャイコフスキー作曲のバレエ作品からの選曲が指導陣の満場一致であった。

(3) 作品作りの留意点

世界三大バレエとは「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」である。全て全幕バレエであるため抜粋（人数的にも時間的にも全幕は不可能であるため）での公演となるため，卒業祝いという場にふさわしい華やかさと荘厳の両方を備えた「眠れる森の美女」を第一候補とした。さらに卒業生2名の女子は，幼少から一般のレベルよりは高い層のバレエ教育を受けてきたため，基礎土台はもちろん，ダンサーとしても十分な実力を備えていた。卒業する両名への選曲として，実力に相応しい舞踊内容を含んだ「眠

れる森の美女第3幕」を選曲することとなった。全幕バレエ「眠れる森の美女」の花形としては主役のオーロラ姫、リラの精（物語のストーリーテラーであり最も重要な役どころ）、第3幕の青い鳥とフロリナ姫（第3幕の花形の役どころ）がある。これらの役は通常プロフェッショナルなバレエ団では女性第一舞踊手であるプリンシパルによって演じられる。卒業生2名の女子のそれぞれがオーロラ姫、フロリナ姫の要素・キャラクターを持ち合わせていたということも選曲・配役の決定につながった。

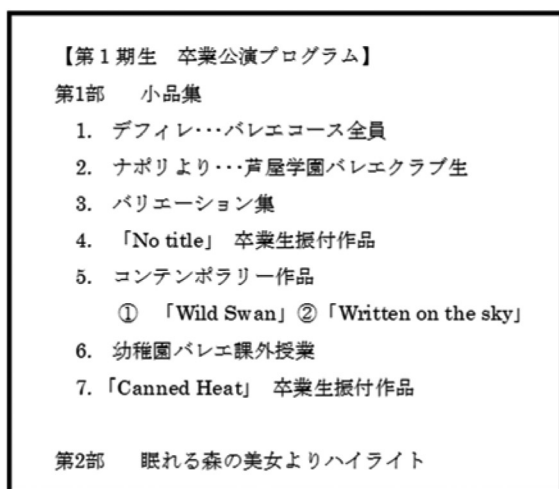


図1：第1期卒業公演のパフレット

(4) 成果と課題

第一期生卒業公演の完成作品は初年度であったにもかかわらず非常に高い完成度であった。これには卒業生2名の実力と存在感、個性派ぞろいの在校生、男子学生の存在、これらが非常に影響したと実感する。男子生徒の存在が、クラシックバレエの伝統的な舞踊方式である「グラン・パ・ド・ドウ」を実現することに繋がり、抜粋であるにもかかわらず本来の全幕バレエ上演と同じくらいの叙情的な面と技術披露ができた事は観客を魅了できた一つの重要な要因であったと考える。個性豊かな在校生は、各自の持ち味を活かした役どころを演じる事で実力向上をし、学生同士の団結力をさらに強く深めることとなった。

主演目の「眠れる森の美女」はプロローグ、エピローグ付きの全幕バレエであるが、プロローグは主役オーロラ姫の登場する第1幕の前の重要な場面でありここに登場する6人の妖精達（オーロラ姫誕生祝いにつけつけた妖精達）は主役レベルで構成される。バレエコース卒業公演では抜粋として第3幕を主軸としたので本来ならばこの6人の妖精の場面は踊らない構成であるが、抜粋での上演という事を利用しての独自の構成を仕立てた。第3幕は格式あるポロネーズの曲で祝賀に訪れた客人達の挨拶の幕開きが大抵である。しかし、我々の構成ではプロローグの曲を使い美しいパステルカラーに身を包んだ6人の妖精の登場を幕開きとした。この作品の展開によりストーリーテラーであるリラの精の存在を確かにして、物語性を失うことがないように進行させた。個性派の在校生は、それぞれ特有の性格と贈り物を持ってくる6人の妖精そのものであった。彼女達の演技力と妖精としての団結力が幕開きを華やかに彩り、物語を観客に最後まで伝えることとなった。

一方、第一部小作品集は、卒業生自らが作品の振付・演出を発表できたことも、大きな成功の要因であるといえよう。4年生の「振付」授業を利用し、舞台空間の基本を学習することで「空間利用」を主軸に作品をそれぞれが完成させた。上級生が下級生に自分の想い、動きの本質などの振付作業をする事で、上下関係というよりも“創る側”と“演じる側”の信頼感が生まれた。本番まではそれぞれが困難な状況を体験しながら、半年間の練習を共に過ごした結果、作品への愛情とこだわりが醸成し、完成させたいという強い思いがぶつかりあう中で納得のいく作品に仕上がった。

上演作品すべての完成度の高さと、学生全員が得た重厚な達成感は、一人一人が自身の最高潮に挑み、それを実現する努力を惜しまずに突き進んだことにある。第一期卒業公演が未だに一番完成度が高く感じられるのは、役者がそろっただけでなく、役者を支える側になる人間がいる事（表舞台にはみえない存在）に、学生が気づきそしてお互いを支えあった事も確かな要因である。

完成度の高い結果を出す事となった一期生卒業公演は、在校生にとっての新たなる目標となり憧れの場となった。常に目標設定による実技授業へ取り組み、クラブ活動への意欲と下級生育成の責任、また大学行事にバレエコース独自の姿を披露したいという意欲、“バレエレッスンをこなすだけでない”、“特殊技能者としてできる事を探す”というような成長と覚醒は確かであった。

一方、第一期生卒業公演の課題として、「学生自身で創りあげる舞台」ということが希薄になってしまったことである。初めての公演ということで、事例がなく学生自身で判断できることが少なかったため、教師側からの指示待ちという状況が多くみられた。この「学生自身で創りあげる舞台」という点で次年度は大きな壁にぶつかり、新たなる取り組み方に挑戦することとなった。

2-2-2. 第二期生卒業公演

(1) 第2期生卒業公演の出演者

●大学生

4年生：女子4名／男子1名、3年生：女子2名、2年生：男子2名、1年生：女子3名

●中高バレエクラブ生徒：3名

●附属幼稚園バレエクラス園児：12名

(2) 選曲について

- ・第一期生の時と同様にチャイコフスキー3大バレエからの選曲を検討した。
- ・5名ともに満足できる作品として「くるみ割り人形」を選曲した。

(3) 作品作りの留意点

バレエ「くるみ割り人形」全2幕は、クリスマスの夜に少女クララが見る夢の中の話であるが、一人の少女の成長という大きな意味も含むこともあり、ジャンルを超えた表現でも上演される古典名作である。第2幕は、王子を救った少女クララが、王子の故郷であるお菓子の国に招待され、華やかな各国のお菓子の精と楽しい時間を過ごす。お菓子とその発祥の国が連携し、音楽・踊り・衣装全てで世界一周を感じられる華やかさと賑わい、キャラクター性のあるディヴェルティスマンが有名である。2幕のディヴェルティスマンに、卒業生5名の個性を活かした役どころが一致するという点に着目し選曲・配役を決定した。

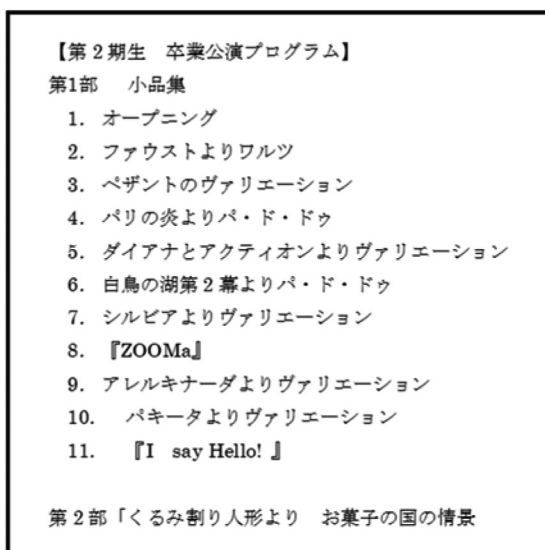


図2：第2期卒業公演のパンフレット



(4) 成果と課題

第一期生卒業公演終演後、課題となった「学生自身で創りあげる舞台」を実践すべく、早々から教員と学生合同ミーティングを設けた。全体の舵取りは教員が受け持ち、制作部分の担当部署については、5名の卒業生に振り分け「舞台上演に至るまでのピラミッド体制」を確立させて作業を進めた。本コースは経営教育学部経営教育学科に属するため、学生が経営学、マネジメントについても学修することを方針としていた。第一期生卒業公演では、マネジメント学習も向上させるという点まで至らなかったもので、二期生からは自主制作に近い方法で取り組んでもらい、舞踊手としてだけでなく、制作面での学修も目標設定とした。

卒業生全員、非常に積極的に取り組む意気込みは良かったが、解釈の相違が学生間で生じる事となった。何事にも解釈の相違、意見の食い違いは生じる。これらは、最良を目指す、もしくは最良の方法を見つけ出すためには決して無駄ではなく、必ず生じる現象である。「創りあげる」ということに焦点を持ち、各部署担当学生同士での意見の食い違い、価値観の違い、時間利用の感覚の違いなどが発生したのであれば、それは必要性不可欠な「意見の相違」と解釈できた。だが、実際は少々違っていた。それは「学生自身で創りあげる舞台」の解釈が「卒業生の希望をかなえる舞台」とまで飛躍し、勢いをつけて一人歩きをしてしまった。このことにより、全ての進行は一時停止せざるを得ない状況となり、下記の説明をした。

- ・それぞれの意欲と意見は重要である
- ・全員の意見をまとめるためにお互いが譲りあう点も生じる
- ・卒業公演は「卒業生をバレエコース全員で祝福し送り出すためのものである」
- ・卒業公演は卒業生だけの舞台ではない
- ・「学生自身で創りあげる」とは自分たちが都合よく運営するのではない
- ・「学生自身で創りあげる」とは経験豊富な4年生が下級生を支え、意欲と達成感を与え、引っ張っていくリーダーシップを確立させる事である

話し合いの後、全員が再び同じ目標に向かって航海を再開し、各々自分自身の役割を最後までやり遂げ、好評を博し無事に終了することができた。

第二期生公卒業公演は、学生主体を目標に掲げ、途中難航もあったが見事に全員で突破口を探求し、終了時には本コース学生全員がレベルアップし、成長できたという事はバレエコースとしての大きな収穫であった。彼らは、幼少期よりクラシックバレエに魅了され、大きな夢を抱き、ひたすら一途に練習に打ち込んできた。例えつらい事があっても夢を実現するために、前進してきた彼らにとって舞台人＝スペシャリスト（特別な才能を持っている）、そんなイメージであったはずだ。しかし、我々は今回共同作業の困難さに直面したということが、彼らを真のスペシャリストに成長させたと考える。

社会は、スペシャリストもしくはスペシャルな人々で成り立っている。クラシックバレエの世界で観客にとってのスペシャルはダンサーである。舞台上で演技をし、そのエネルギーを観客へ伝える役目である。そのダンサーが、スペシャルな存在となるように真のスペシャリストは表からは見えない舞台裏に存在する。ダンサーを育てる（演出・指導）、ダンサーが輝くように装いを作りかえる（衣装）、舞台上で最高峰の輝きができるように映し出す（照明）、舞台上の時代を作り変える（装置）、観客と舞台上を同じ時空につなぐ（音楽）。バレエ上演はダンサーのみで成り立つ事は困難である。華やかに見えるバレエ公演は多くの才能ある人々により伝統の灯を失わずに今日に存在している。バレエを通じて学生に、常に切磋琢磨の精神を持ち大きな目標に向かって自分自身に挑戦して欲しい、と改めて感じた卒業公演であった。

2-2-3. 第三期生卒業公演

(1) 第3期生卒業公演の出演者

●大学生

4年生：女子2名、3年生：男子1名、2年生：女子2名、1年生：女子6名／男子1名

●中高バレエクラブ生徒：2名

●バレエ教師課程ディプロマコース受講生：4名

●附属幼稚園バレエクラス園児：7名

(2) 選曲について

一期生、二期生とチャイコフスキー作曲の世界三大バレエから選曲をしてきたが、第三期生は2名とも個性豊かであったこと、1人は個性豊かな演技力の持ち主、1人は観客を魅了する回転技の達人であった事も考慮し、チャイコフスキーから一転してミンクス作曲「ドン・キホーテ」（セルバンテス原作）、スペインのバルセロナを舞台として情熱的で明るい作品を上演する事となった。

(3) 作品作りの留意点

「ドン・キホーテ」はキトリとバジルの恋愛を中心として、気障男ガマーシュとの仕組まれた結婚から逃れ、二人が駆け落ちする物語である。卒業生の女子2名とも「ドン・キホーテ」の主役キトリを演じたいという意見であった。二人が同時に同じ役を演じるには少々困難が生じるはずであったが、幸いにも全3幕仕立てのバレエ「ドン・キホーテ」各幕に主役の見せ場となる男女のパ・ド・ドゥがあった。男子学生もいたので、三期生も見事に2組のパ・ド・ドゥという華やかな見せ場を実現できる事となった。それぞれが、どの場面で踊るか、という話し合いを持ち、演技力のある者が1幕のキトリを、回転技の技術を見せ場に出る者が3幕のキトリを踊るといった事になった。

この選択は正しい結果を導き、演技力のある学生は幕開きから主役としての技術だけでなくストーリーテラーとして存在感を確かにした。回転技の技術に定評のあった学生は、男女で踊るパ・ド・ドゥに真摯に向き合った結果、技術も存在感も向上するという結果を出した。

ドン・キホーテの音楽はスペインの情熱的な面と、明るく軽快な面を持ち合わせており、万人にとって耳慣れした曲である。少人数でのダイジェスト版（短縮版）であったが、観客の反応はこれまでにはない程に明るく、賑わいのある盛り上がりであった。

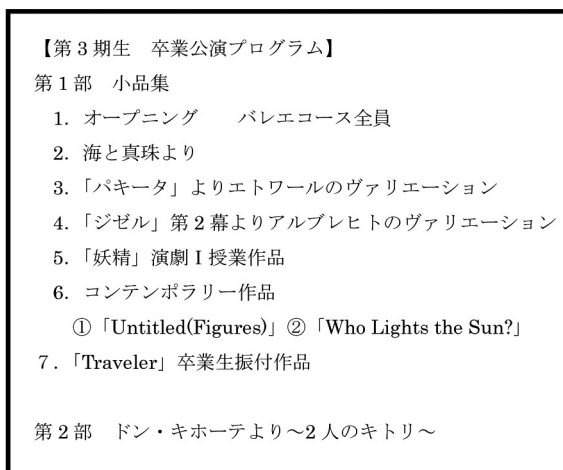


図3：第3期生卒業公演のパンフレット

(4) 成果と課題

第三期生卒業公演で、特に記述しておきたい事は「上級生から下級生への愛情・育成・指導」を感じる作品を卒業制作振付作品として卒業生の1人が発表したことである。前述したとおり、バレエコース4年生になると「振付」授業をカリキュラムにいれ、ダンスコンポジションの基礎知識を学習し、卒業制作としてそれぞれに5分以内の作品を振付演出する機会を与えていた。強制ではないため、「振り付ける」「作品を創る」という作業が苦手の学生は授業内での制作発表、もしくは、場面と音楽を振り分けて卒業作品の一部を担当するなどの選択肢があった。

三期生の1人はバレエコース在校生を全員使って、4分程度の作品の演出振付に挑戦した。週一回の振付授業で進行具合、振付ステップの創作、実際に相手に振付けるための段階毎の指導法などを学習し、実技授業を使って実際に在校生に振付作業をした。常に指導者に師事する立場であった彼女にとって、教示するという事は、なかなかスムーズな進行には至らなかった。「トラベラーズ」は卒業生本人がダンスの勉強に一度はNYに行ってみたいという願望をそのまま実現させた作品であった。振付作業の比較的順当な作業工程をここに記述しておく。

- (1) 題材を決める（物語性のあるものか、音楽性を主張したものであるか）・配役の考察
- (2) 音楽の選曲
- (3) 出演者人数を確認、上演時間を確認、舞台の大きさ、道具などの必要備品を確認
- (4) 振付進行表を準備
- (5) 本番から逆算してのリハーサルスケジュール作成

振付けに入るまでに上述した工程を進める必要があったが、彼女は非常に細かい作業を得意とする性格でもあったため、90分の授業時間を無駄なく使い、着々と準備を整えた。

彼女は作品を創作する事で、自分の夢をバレエで表現する事、下級生（学年ごと）の個性、持ち味を伝えるように配役を作成し、自分の作品を通じて下級生に対する自分の想い、考えを伝える事に成功した。誰もがあこがれるNYの風景を、照明という技術を活用して背景をつくり、自由の女神・セントラルパーク・ブロードウェイミュージカルなどのNYの名物を人物舞台装置で表現した。在校生全員が人物舞台装置となるように、お互いの私物を交換して衣装を集め、配置に工夫をした結果、ルナホールの舞台はNYの街並みとなった。そして3人のトラベラーズ（ダンサー）は個性を發揮し、1年女子は振付け者の意向に答える以上の演技力を發揮した。下級生を想う気持ち、コースを引っ張るために上級生としてやるべき事を成し遂げた、三期生卒業生の振付け作品「トラベラーズ」は名作となった。そして、卒業生に憧れ、更にバレエに没頭し、大学生生活を過ごす学生が誕生した事もかけがえのない財産であった。

3. おわりに

この度の実践報告では、主に芦屋大学バレエコース第一期生から第三期生までの報告書となった。どの学年も個性豊かであり、バレエを純粋に愛する気持ちを持った学生たちだったと回顧している。このような完成度の高い舞台を成し遂げる結果を残す事が出来たのは、バレエコース教員一同がバレエという素晴らしい西洋伝統芸術を通じて、学生に目標を持ってもらい、何よりも生きていく事の素晴らしさを伝え、そして導き成長させたい、という信念の表れであると考え。今一度信念を強く心に留め、さらに発展の道を切り開くために、地道に取り組む日常に感謝していく事であると考え。

そして、いつも我々に挑戦の場を与えてくれ理解してくれる芦屋大学教職員の皆様に改めて感謝の意を表す。